



高橋哲哉さん講演会 ①
 「沖繩の歴史と憲法9条」
 2010年6月26日

大分は3年ぶりとなります。無事到着し皆様にお会いすることが出来ました。今日は沖繩をテーマとしてお話しすることになったのですが、私は沖繩の出身でもありませんし、研究者としても哲学が専門で特に沖繩を研究したわけでもありません。そういう私がなぜ今沖繩問題を語るのかということについて、二つほどの理由があります。

一つは私自身憲法を考える時、沖繩抜きに9条を論ずること、昨年いひゆるの秋に所謂政権交代が

とは不可能だということに久しく気づいてきたということ。「憲法9条のおかげで戦争をしないで今日までを過ごすことが出来た。平和憲法のおかげで、戦後の平和と繁栄を享受することが出来た」とよく言われます。確かに一面ではそうなのでありますが、そこに「沖繩」というフアクターを入れると、そうは言えなくなることが明白であるうと思えます。

もう一つはこの間の日本の政治、

知らなければ責任はないのか？
 知ることが変化の兆しとなる、それが求められているのだと…

日本国憲法 第9条
 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。



起こつたのでありますが、期待された鳩山政権は一年も経たずに瓦解しました。その要因として普天間基地の移設問題がありました。移設を巡って鳩山政権は迷走していると盛んに報道されましたが、鳩山氏自身が政権を退く大きな理由としてこの問題があつたわけですね。そうした状況の中、日本のマスメディアは沖繩に目を向けざるを得なかつたのですが、それを見ていて、大きな要素が抜けていると思えました。「何故沖繩にこれだけの在日米軍が集中してい

るのか」ということです。その歴史的な背景までさかのぼって解説してくれる番組や報道は全くなかつたと言つていいのではないかと。沖繩から見れば違和感があるでしょうがとりあえず「本土」と言わせて頂きますと、本土の日本人の意識のなかで沖繩の問題がまったく曖昧なものになつていて、無意識のうちに沖繩の問題から目をそらし、沖繩が極めて不平等な状況に置かれていたことを無視してきた、もつと言えば沖繩差別というものが私たちの中、日本社会の中にあるということですね。そのことが非常に大きな問題だと感じています。今回普天間の移設問題を巡つての報道を見て、あらためてそのことを痛感しました。昨年の選挙の時から鳩山氏は「最低でも県外移設・できれば国外移設を」と言っていましたし、岡田現外相もそういうことを言っていました。政交代の後、岡田氏は外務大臣

になつてすぐにその甲板を下ろしてしまいました。鳩山氏は最後まで県外・国外の移設案を下ろさないでいたのです。最終的には沖縄の海兵隊は抑止力であり、沖縄の皆さんに負担をお願いし、辺野古に新しい基地を作るほか道筋は立たないという結論になり、沖縄に身を運びお詫びをしたという経緯があります。結果としては自民党政権の時代に戻ってしまったわけで、沖縄の人にとっては極めて深い失望・絶望があると思うのです。どうしてこういう事になるのか、その所以を私たちは自覚しなければならぬと思います。基地が集中する沖縄で最も危険な普天間飛行場、世界で最も危険な米軍基地と呼ばれる普天間、この基地の移設一つがままならないのは何故なのか。まず私たち自身がその歴史的な経緯と背景を理解しなければならぬし、そのような事態になっていることは明白な差別な

だということを自覚しなければ、この硬い構造は変革できないと思うのです。何故沖縄に基地が集中し、政権交代後の鳩山政権もこれを乗り越えることが出来なかったのか、そのあたりを考えてみたいと思います。



■基地負担に謝罪と「謝意」

鳩山政権が瓦解したあと菅内閣が誕生したのですが、菅首相は「新たな日米合意」つまり辺野古に移転するという合意を着々と進めていくと表明し、沖縄の人はさらなる失望を経験しています。今ここに6月24日の付けの『沖縄タイムス』を持ってきていますが、一面に「不戦固く誓う・終戦65年慰霊の日」となっています。ご存じのように6月23日は「沖縄戦の終結の日」であります。この日を境に戦闘がまったくなくなつたわけではありませんが、前日の22日に沖縄に派遣された第32軍司令官の牛島満中将・参謀長が自決し、6月23日が沖縄戦の終結日とされたのです。この日を「慰霊の日」として毎年いろいろな行事が行われるのですが、この新聞を見ると、沖縄戦の記憶がいかにほど大きな意味を持ち続けているかと

言うことが推し量られます。中見出しに《基地集中なお・菅首相県民に謝罪と「謝意」》とあります。菅首相は戦後ずっと沖縄に過大な基地負担をお願ひしてきた、そのことに対してお詫びの気持ちを示したということですが、さらに首相としてお礼を申し上げたいと述べたと。これに対して『沖縄タイムス』の《視点》という論説では「負担強い感謝・詭弁」という記事が書かれています。押しつけておきながらそれに感謝というのは詭弁だと。菅首相は6月11日の国会の所信表明でも「感謝」という表現を使いました。本土のメディアではあまり注目されていませんでしたが、6月12日の『琉球新報』の一面トップに「菅首相基地負担に『感謝』」括弧付きで感謝ということが報じられ、その批判が載っています。そして『沖縄タイムス』でも「歴史・民意の理解があまりにも浅い」「感謝発言に違和感」

と指摘しています。社会面では「菅首相基地負担に『感謝』発言」、「県民から批判の声」、「お礼を言われても…」とあります。先ほども申しましたが、沖縄を知らずしては憲法を語ることが出来ないだろうという認識を持つようになってから『沖縄タイムス』と『琉球新報』の二つを郵送して貰っています。本土の新聞ではまったく報道されていないことが沖縄では大きな問題になっていることが沢山あり、これらの新聞を読むと沖縄の人たちの気持ちが伝わってくるような気がします。

■近代日本の植民地主義

お手元の資料の簡単な年表を参照しながらお話をしたいと思います。沖縄の歴史を考える時、昨年一年間、2009年に大きく取り上げられたことが二つあります。本土の人は殆ど知らない

事なのですが、二つのことが盛んに議論されました。一つは1609年3月に薩摩藩が琉球に軍事侵攻したという歴史。秀吉はアジアを征服しようという野心を持っていましたが、徳川幕府になって島津藩が琉球に軍事侵攻して、それ以降、薩摩は琉球から年貢を取り立てるなど一定の支配をふるってきたのです。その島津の侵攻から400年目に当たる年ということで、そのことが持つ意味についてシンポジウムを開くなど様々な形で議論されました。ここに上里隆史さんという人の『琉日戦争1609』という本があります。これは最新の研究成果を踏まえながらの「琉日戦争」の実態を解き明かした本だと言っていると思います。これを見ますと薩摩は琉球に何をしたのかということがわかります。1609年以降、沖繩は薩摩の支配が及んでいくわけですが、他方、沖繩は中国との関係を深めながら琉球王国という独特の地位を保ってきたと考えられます。ところが、その琉球王国が廃絶される出来事が起こります。それが1879年に起こった出来事で、明治政府は「琉球処分」と呼びました。1609年以降も独自の存在を保っていた琉球王国に、明治維新後に作られた日本の軍隊を派遣し、軍事力で威嚇しながら琉球王国を廃止し、沖繩県を設置して日本に正式に組み込むということと、すなわち「琉球処分」をやったわけです。昨年は琉球処分から130周年ということで、この問題についても盛んに議論されたのです。このことは薩摩の支配とは全く異なる意味を持ち、現代の沖繩の歴史を考えるには必ずここまでは遡らなければなりません。これは近代日本の植民地主義が始まった最初の出来事といっても良いわけで、沖繩は最初の日本の植民地となったと言ってもよいのです。北の方では北海道の開拓という名のアイヌモシリへの侵略があつたわけですが、沖繩と北海道が近代「国民国家」に組み込まれた最初の植民地だと言えます。これ以降、沖繩の人たちは明治政府が押し進める同化政策によって、帝国「臣民」となるように迫られていくこととなります。日本国・天皇の臣下となるための徹底した教育が始まるわけです。1930〜40年代の軍国主義が強化される遙か以前から天皇制が沖繩のひとびとを支配することになるわけです。その基礎となつたのが日本語の教育です。沖繩の言葉は和の言葉とはかなり違っています。学校教育の中で沖繩の言葉が禁止されていく、方言をしゃべつたということで廊下に立たされるといふようなことが起こるわけです。沖繩に限らず学校の先生というの

は植民地主義の先兵としての役割を果たしていく。そしてこれが、その後の台湾や朝鮮半島の植民地教育の先駆けとなるわけです。

1894年日清戦争に勝利したことで台湾の割譲がなされるわけですが、台湾は無抵抗であつたわけではありません。独立運動や武装蜂起などの抵抗運動が起こるわけですが、明治政府は軍を派遣して台湾征服戦争に乗り出し、全土を制圧します。これが台湾領有という出来事です。そしてさらに日露戦争に勝利した日本はその余勢をかって朝鮮を保護国とし、さらに1910年に併合する訳です。今年が「日韓併合」100周年となり、この問題も考えなくてはならないのですが、琉球処分・台湾領有・韓国併合という歴史を忘れてはならないのだと思います。ここで韓国併合というのは今の韓国ではなく当時の「大韓帝国」をさします。

そうした植民地化・同化政策の帰着点として起こってしまったのが「沖繩戦」ということも言えるのではないのでしょうか。1945年の3月26日に慶良間諸島に米軍が上陸するのですが、本格的な戦闘は4月から6月まで三ヶ月間。24万人を越える犠牲者をだす近代戦争史上でもまれに見る激しい地上戦が繰り広げられました。鉄の暴風といわれる艦砲射撃で島の形が変わるほど破壊されたあと、民間人を完全に巻き込んだ地上戦でも米軍の激しい攻撃があつたことはいうまでもありませんが、沖繩戦が日本との関係で非常に深い傷を残したのは、たとえば民間人の「集団自決」です。集団自決という言葉はふさわしくないといふので最近「強制的集団死」と呼ばれることもありましたが、追い詰められたときは米軍に投降せずに自決せよという軍の命令、誰が出したのかという裁判もありました



が、日本軍の圧力で相当数の人々が自決に追い込まれたということ。もう一つは日本軍による沖繩人の虐殺です。こうした事態が何故起きたのかというと、日本軍が最後のところで沖繩の人々を信用しなかった。沖繩の人々は元々異民族で天皇に対する忠誠心が薄いので、投降して米軍の支配下に置かれると様々な機密を漏らす恐れがあると考えて圧力をかけていた。そういう中で殆ど沖繩だけだと言っている民間人の集団自決や虐殺が起こったと考えられているわけです。

■ 国体護持のための捨て石

この沖繩戦について沖繩の人たちは日本の捨て石にされたのだという意識を持つているといわれます。当時の日本の指導層にとって最大の課題は「国体護持」ということでした。大日本帝国という天皇制国家の体制を維持する。敗戦の直前には天皇制を維持するというのが至上の課題で、その為に戦争を続けた。沖繩戦も国体護持のための時間稼ぎであったという見方があり、それで「捨て石にされた」と。沖繩戦直前の2月に、近衛文麿元首相は「このままでは日本は敗戦となる。国体の護持が危うい。早く戦争終結に向かう工作をした方が良い」と昭和天皇に直々に意見を上げたわけ。この時に近衛の上奏を聞き入れていけば、沖繩戦や全国規模の空襲、広

島・長崎の原爆は起こらずにすんだという事が考えられるのですが、その時天皇は近衛の意見を退け、「もう一度戦果を挙げて、日本に有利な状況を作って戦争終結にむかわないと国体の護持が危うい」という陸軍の意見に沿ったといわれています。戦争を止める理由も継続する意味も国体を護るためであったことが分かるのです。

戦後の一つの神話ですが「天皇陛下の聖断」、偉大な決断によって戦争は終結し国民は救われたのだという物語が語り継がれています。沖繩の人に言わせればそんな聖断なんてものは遅すぎた。「遅すぎた聖断」でしかなかったわけです。国体護持の保障が得られない限り戦争は終結できないということ、極端な人は「一億玉砕しても天皇を護る」と…。(次号に続く)

文責・日野詢城

宗教者9条の会・大分事務局
〒879-5102
由布市湯布院町川上3561 見成寺
TEL 0977-84-2257 FAX 0977-84-5203
年会費 3,000円
郵便振替口座 01720-1-111731

会費・カンパ どうも ありがとうございます。
高藤 英則／藤井 邦磨／西郡 均／石光 順照／
藤並 晃照／宮脇 利夫／松井 実世弘／小栗栖法秀／
尼子 芳淳／立川 教洋／槇島 隆俊／宮崎 わかこ／
掛橋 泰定／小峰 恭丸／木津 英展／黒野 光治／
丸小野 邦彦／土田 美奈子

編集後記

◆ 27号の校正を
お願ひしていた高橋哲哉さんからのメールの冒頭は「昨日まで4日間ソウルで「韓日強制併合100年」の会議に参加してきました」でした。

◆ 1910年8月22日抗日運動のある中、圧力と巧みな世論操作などで日本に併合。併合条約は一方的なものでありその第1条に「韓国全部に関する一切の統治権を完全且つ永久に譲与する」とあります。徹底した日本語教育があり、屋外で母国語を使うことさえ許されていなかったと言われている。

◆ この夏NHKなどのメディアで多くの人々が「戦争の実態」を証言しました。8月29日NHK・BSハイビジョンでは「軍民一体・孤島での悲劇」と題して沖繩・伊江島の戦争体験が報道されました。沖繩戦には54万人のアメリカ兵が投じられたと言います。小さな島の住民はわずか、千人規模の動員が行われ、軍民一体となった戦いが強いられました。1500名あまりの犠牲者のうち90家族は家族全員が死亡、自決によるものだという。

◆ 本土の私たちには沖繩の問題を知らなすぎると思う。9条を護ろうという運動の中で「沖繩問題」を抜きに出来ないことを学びました。気の遠くなるような基地の問題、それを少し「私たち自身の問題」と考えるようにしたい…(編)

年会費納入・カンパをよろしくお願ひします。